

平成24年度

中学入試（1回）

国語試問

注意事項

試験開始のチャイムが鳴るまで勝手にあけてはいけません。

1. チャイムが鳴ったら、ページ数(17ページあります)を確認しなさい。
2. どの問題からやってもかまいません。
3. 解答はすべて別紙の解答らんにはきなさい。

号 室		番 号		氏 名	
--------	--	--------	--	--------	--

一 次の①～⑤の [] に当てはまることばを後の語群から選び、漢字で答えなさい。

- ① 彼の実 [] なら十分だ。
② [] 型的な冬型の気圧配置。
③ 久しぶりに故郷へ帰 [] する。
④ [] 乗値上げは許せない。
⑤ 平 [] な表現を心がける。

《語群》

イ セイ セキ テン ビン

二 次の①～⑤の [] に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ① 銀行にお金を [] ける。
② 彼は面倒な仕事も [] く引き受けてくれた。
③ 念仏を [] える。
④ キャッチャーが [] えたところに投げこめ。
⑤ そんなことで弱 [] を吐くな。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

哺乳類や鳥類の親は、子どもの世話をよく行います。それに反して、爬虫類や魚類の親は、卵を産んだらそのまま、子どもの世話はあまり行いません。卵をたくさん産んで、偶然生き残る子どもに、遺伝情報の存続をかけているのです。

生物進化の原理に従えば、「子孫が生き残りやすい生殖方法」を指令する遺伝情報が存続するのです。爬虫類や魚類は、子どもの世話をかけずに、なるべくたくさん卵を産む方法をとりました。哺乳類や鳥類は反対に、限定した数の子どもを世話して、子孫が生きのびる可能性を高めました。どちらも現代まで生き残っていますので、それぞれがそれなりにうまい方法なのでしょう。

「子をまもる愛情」らしき行動は、哺乳類や鳥類に見られます。進化心理学の視点からすると、その種の行動は、子どもを世話する生殖活動のなかから生まれてきたと考えられます。では、その動物の行動に、私たちが感じるような「愛情」がともなっているのでしょうか。

私は、ライオンが子どもたちを世話する様子を見て、ライオンにも私たちと同様、愛情があるのだろうと感じます。たとえば、バッファロー（野牛）の群れにまぎれて行方不明となった子どもたちを探している母ライオンは、不安そうな表情を浮かべます。子どもが見つかった後には、一転してうれしそうです。

① しかし一方で、ライオンの愛情は人間とちがうな、と思うこともあります。同じ母ライオンが、成長した雄の子ライオンを威嚇して、群れから追い出しているのです。このときの迫力ある表情には、愛情のかけらも読みとれません。ライオンの群れは雌たちと子ライオンからなっており、雄の成獣は、群れには残れない掟なのです。（ただし、その群れをなわばりにする雄の来訪は歓迎されます。）

② 進化心理学では、心の働きには「領域特異性」があると考えられています。「領域特異性」とは、外的な状況によって、別の心の働きが起動するという性質です。

雌ライオンには「愛情をもつて子ライオンを世話する」という心の働きと、「群れをなわばりとしていない雄ライオンを、怒りをもつて

排除する」という心の働きが、ともに進化しています。それらは、ときにあい反する働きをするのですが、雄の子ライオンがどの程度成長しているかという、外的な状況で、どちらが働くか明確に決まります。

鳥類でも冷酷とも思える行動の変化が見られます。鳥は卵を長期間温めてふ化させ、生まれたヒナに餌を運びます。非常に重労働なのですが、手間をおしまず愛情をかけて子どもを育てます。ところが、外敵に巣を荒らされたり、気象の変化で巣が破壊されたりすると、卵やヒナが生きていても簡単に巣を放棄します。

同じ場所の巣づくりに固執すると、同様な状況が再来した場合に、ふたたび大きな損失が見込まれるのです。そのような場合は、別の場所から巣づくりしたほうが、有利なのでしょう。「野生の心」には、子を育てる愛情と、放棄する非情さが同居しており、外的な状況におうじてスイッチされているのです。

人間の場合はどうでしょうか。人間の子どもは、他の哺乳類や鳥類よりもずっと養育に手間がかかります。成人に達するまでにたくさんの食事を与えて保護したうえ、さらに集団の役割を学ばせたり技能を習得させたりするのもたいへんです。この傾向は狩猟採集時代から、現代に至るまで、それほど変わっていないでしょう。

養育に手間がかかるならば、より少ない子どもを確実に育てるほうが得策です。先の鳥のように巣を放棄して次にかけるよりも、それまでの投資にこだわって、なんとか巣を修繕して子どもを育てる方向にかけたほうが有利なのです。

その結果、人間では子どもに対する愛情が非情さを上まわって、つねに働くように進化してきました。しかし、私たちの心の底では、野生の非情さが眠っています。外的な状況によっては、それが発動されることもあるのだと、認識しておかねばなりません。

ここまで子どもを育てる話をしてきましたが、ここから子どもをつくる話に入ります。ほとんどすべての動物が、それに一部の植物も、有性生殖をします。雄と雌の個体が存在し、両親の遺伝情報をシャッフルして子どもに伝えます。

有性生殖の最大の利点は、環境に適応する方向に、遺伝情報が高速に変化できることです。

1

〈注〉2 固執——こだわること。

3 狩猟採集時代——農耕が始められる以前の、野生の動植物を狩ったり、採ったりしていた時代。

4 シャッフル——混ぜ合わせること。

このように有性生殖によって、環境の急激な変化に対して、いち早く対応できる利点があるのです。(ただし、伝染病が姿を消すと、特性をもたない人も生きのびられるようになるので、特性をもたない人が再度徐々に増えていきます。)

多くの哺乳類や鳥類では、有性生殖の相手である配偶者に愛情を示します。これは、協力して子育てをするという習慣に起因しています。子育てがたいへんであればあるほど、協力が必要ですから、配偶者間の結びつきは強く進化します。鳥では、シーズンごとにつがいの相手が変わる種類も少なくないのですが、人間の場合は、ときには一生涯にもおよびます。

親が子へ抱く愛情もそうですが、配偶者のあいだの愛情も献身的です。たとえば、じぶんが危機的な状況におちいても、相手を救おうとします。献身的な気持ちがあれば、じぶんが生き残らずとも、子どもと配偶者が生き残り、献身さが遺伝情報によって代々ひき継がれていきます。それが、子孫が生き残りやすい心の働きが存続するという、進化の仕組みなのです。

狩猟採集時代、人間の祖先は一〇〇人程度で集団活動をするようになりました。集団は、親子とその親せきなどの、ごく少人数から始まったのでしょう。本章ではここまで、子への愛情や、配偶者間の愛情について述べてきました。血縁関係のある集団の結束力は、そうした生殖のうえでの愛情がもとになっていたのでしょうか。

しかし、集団の人数が増えてくると、血縁関係が薄い人々同士も増えてきたでしょう。そこでは、旧来の愛情に代わって人々を結びつける、新たな感情が必要になりました。その役割をになったのが「友情」です。同じ集団のメンバーに対して献身的にふるまえば、集団の協力が進み、みんなが存続できるのです。

友情の背景にあるのは、個人間の助け合いです。前に述べたように、狩猟採集時代は、いつも安定して獲物がとれるわけではありませんでした。獲物がとれた人は、とれなかった友に獲物を分け与えるのです。ケガをして猫に行けなくなったとしても、友に支えられたでしょう。共だおれをしないかぎりは、友情をもつ人々がいっしょに生きのびられるのです。今日ある「保険の仕組み」と同様の構図が、感情で築かれていたと考えられます。愛情が「ジャングル由来」であるのに対して、友情は「草原由来」だと言えます。

〈注〉5 配偶者——夫に対する妻、妻に対する夫のこと。

6 献身的——自分を犠牲にして他のためにつくすこと。

7 ジャングル由来——人間の祖先の動物がジャングルで生活していた頃に身につけた心の働き。

8 草原由来——人間の祖先がジャングルから草原に出て狩猟生活をする中で身につけた心の働き。

愛情が、どちらかというと一方的な献身を駆動しているのに対して、友情はずっと相互的な献身作用となつています。ですので友情は、一方的な献身がつづくと崩れてしまう可能性があります。そこで、献身に対して献身でこたえようとする心の働きが、さらに生みだされました。義理人情や恩です。

人間はふつう誰しも、一方的な献身がつづけられれば、義理に感じて恩がえしをします。そのような「負債感(借りを背負った感じ)を解消したい」という思いが、集団の結束力を飛躍的に高めました。ケガをして猟に行けなくなったならば、「せめて槍をつくるので貢献しよう」などと思い、集団の協力や分担が促進されるからです。

この関係は、人間の親子のあいだにも見られます。親は子に一方的な愛情をそそぎます。子はしばしばそれを恩で報いるのです。「愛情↓恩」の関係が、親子を相互の結びつきにしており、血縁集団をより強固にしたわけです。

多くの動物のうちでたぶん人間だけが、集団の中で長老を敬う姿勢を身につけています。この姿勢は、恩の精神に支えられたものと思います。さらにこれは、知恵や経験を重んじる姿勢にもつながっていたのだ、と推測できます。

単純に人々が集まるだけでは、協力集団は形成できません。個々のメンバーが利己的にふるまっていたら、集団全体での分担は成立しません。しかし、ひとたび他者のために働くという傾向性が現れたならば、協力が促進されて集団が強くなります。集団の生産性があがれば、個々のメンバーの利益もあがる、というものです。

つまり、利他的に働けば、集団をとおして、利己的な利益につながるわけです。そして、その一時的に損失をこうむるような行動を駆動しているのが、愛情や友情、義理人情や恩などの、感情なのです。^⑤「野生の心」が協力集団の各メンバーを結びつけているのです。

(石川幹人『人は感情によって進化した』より。作問の関係で、一部表記を変えているところがあります。)

〈注〉 9 駆動——かりたてること。 10 貢献——役立つ何かをすること。

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「」などの記号は、字数に数えないこととします。

問一 次の例文の〰線部のうち、——線部①へしかしと同じ使い方をしているものには○を、異なる使い方をしているものには×を、それぞれ解答欄に記入しなさい。

ア 漢字を書くことは難しい。しかし、読むことはやさしい。

イ 彼は先生に注意された。しかし、彼は行動を改めない。

ウ 明日は日曜日だ。しかし、朝からプラスバンドの練習がある。

問二 ——線部②「領域特異性」とありますが、この話題について述べられているのは、どの段落までですか。その段落の最初の3字を、本文中から抜き出して答えなさい。

問三

1

には、次のア～カの文が入ります。意味が通るように正しい順番に並べかえ、解答欄に記号で答えなさい。

ア ところがさらに、A特性をもつ人とB特性をもつ人が有性生殖をすると、子孫にAとBの両方をもつ人が高い確率（二五％）で現れます。

イ やがて、子孫は両特性をもつ人ばかりになり、その伝染病は姿を消します。

ウ A特性をもった人の子どもはA特性をもつ可能性が高く、子孫をたくさん残せます。B特性をもつ人も同様です。

エ たとえば、伝染病が流行したとします。

オ この両特性をもつ人は、その伝染病に非常に強いのです。

カ その伝染病にかかりにくいA特性をもった人と、罹患（りかん）（かかること）したとしても比較的軽くすむB特性をもった人が、たまたまいたとします。

問四

——線部③「今日ある「保険の仕組み」と同様の構図」とは、どのような構図ですか。解答欄の「1」という構図。」につながるように、25字以上30字以内で説明しなさい。

問五

——線部④「利他的に働けば、集団をとおして、利己的な利益につながる」とありますが、これとほぼ同じ内容を意味する「ことわざ」を、ひらがなで答えなさい。

問六

——線部⑤「野生の心」が協力集団の各メンバーを結びつけているのです」とありますが、だとすれば、この結びつきには「領域特性」も引きつがれているわけで、外的な状況によって、同じ対象に、非情さが発揮されることもあることとなります。実際、人類の歴史には、その非情さの最たる例である国どうしの戦争が、数多く記録されてきました。では「野生の心」が国どうしの戦争を引き起こす仕組みを、次の□に当てはまるように、後の語句を必ず使って60字以内で説明しなさい。

「野生の心」は、

ため、利害の対立が起こり、

それに感情的な対立もからむと、戦争を引き起してしまう。

語句

協力集団 利他的 （ただし、使った語句の右側に~~~~線を引きなさい。）

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 少年の一日は、まるで夢のようであった。少年を射すくめる父の眼はなかった。一日中、母にまつわりついていても、もう自分を怒鳴りつける父の声はない。少年は、母の膝にだかれたり、一緒に絵をかいいたり、石のように堅くこった母の肩を小さなこぶしで叩いたりした。午後になると、医者が離れにやって来た。背広に下駄をはいて、川土手を自転車に乗って来る。川土手から両側に鳳仙花の咲きはじめて小道を自転車で滑りおりて来て、離れの前で軽業師のように自転車をとめた。そして、ちらつと庭先の高い柿の木をみあげて、

「今年は、よう実がなつとるなあ」

とか、

「今年は、この木はなり年じゃ」

とかといって、離れの土間にはいつて来るのであった。

医者は黒い靴から聴診器を出して、母の胸や背にそれをあて、仔細げに首をひねったり、耳から聴診器をはずして、ポンポンと打診したりした。少年は、そんな時、ちよつとはずかしげにしている母の痩せ細った胸や背が、青くすきとおるほど白いのをみつめていた。

打診や聴診が終ると、医者は、

「だんだん元氣になつとるんで、心配しちゃあいかんよ」

といって、母の背に注射をうった。

医者は帰る時、少年を、自転車の荷物台にのせた。

② 「田舎へ帰って来て、一日中、家の中にすつこんでいるやつがあるかい」

少年にはそういったし、母には、

〈注〉 1 鳳仙花——ツリフネソウ科の一年草。夏に赤、白、紫の花を咲かせる。

2 軽業師——危険な曲芸を職業として演じる人。

3 仔細げに——物事のくわしい事情を知っている様子で。

「子供は、外で遊ばさにやあ、いかん」

といった。医者は少年を乗せて、土手道や田や畠の中の道を連れあるいた。午後の往診の間中を、そうしてずっと連れあるくこともあったし、往診が早くすんだ時は、山ぎわの自分の家まで連れて帰って、夕方近くまで一緒に遊んでくれることもあった。

そんな時は、川からひいた小さな流れに網をいれて小魚を追ったり、畠にわなをしかけて雀をとったりすることを教えてくれた。

雀わなは竹のひごを深くおりまげて、雀が歩くほどの高さにわなをしかけてあるのだった。そのわなを畠のうねの間に立てておいて、遠くから雀を追ってゆくのである。

医者は背をかがめて、両手で左右のズボンをバタバタ調子をつけてたたきながら、ホー、シュッシュッシュと雀を追った。雀はチョコチョコと跳びながら、うねの間を逃げてゆく。

「坊主も追ってごらん」

医者は少年を前に立てて雀のあとを追った。医者がズボンをたたき、少年が、

「ホー、シュッシュッシュ」

と医者声を真似る。逃げてゆく雀は眼の前にしかけられたわなに気づかないで、わなの中に頭をつつこんでしまうのだった。

少年は鮎をつることも教えられた。祖父の家から川土手を五町ばかり上っていくと、竹藪のかげに淵があった。少年は医者からもらった小さな釣竿をもって、午後になるとその淵に行った。裏の渡しで釣ることもある。少年の顔は、日増しに赤く陽灼けしていった。

少年は、そとで遊ぶ面白さをおぼえたようである。勿論、自分では、祖父母や医者が自分が母と一緒にいることを避けさせようとしていたことは知らない。いつか村の子供たちとも遊ぶようになっていた。もう医者が連れ出さなくとも、村の子供たちと一緒に渡しに乗りたり雀を追ったり、鮎や鯰をつったり、また木に登ったりして遊んだ。

そんな夕方、少年が、一日中を遊びつかれて、祖父の家の煙出櫓の見えるあたりまで帰って来ると、痩せた母が枯木のような姿で、川

〈注〉 4 町——長さの単位。一町は約一〇九メートル。

5 煙出櫓——煙を屋外に出すための建築物。

土手に立っているのが遠くからみえた。

「お母さん」

少年は、大きな声で叫んで、川土手道を駆けて帰ると、母は、少年をいだきよせて、

「どこで遊んでいたの、川に落ちたり、木から落ちたりしてはいけないよ」

といった。

少年は、自分がどんなことをして遊んでいるか、毎晩、母のそばで話してきかせた。少年がとった雀が、祖父に羽をむしられ醤油で焼かれて、母の食膳にのせられている時など、少年は得意そうに自分がその雀をつかまえたことを話すのだった。それは、最初、少年に雀わなをかけることを教えた医者が、

「坊主のとった雀、お母さんに食べてもらおうのだぞ、そうすると、お母さんは元気になれるんだ」

といったからである。

③「そう、お前がとってくれたの」

母は、淋しそうに少年にほほえみかけて、そうこたえた。

野面の稲穂が黄色くいろづき、庭先の柿の木の実が赤く夕陽に映えはじめた。北山から吹きおろして来る風が肌に冷たく感じはじめる。その頃になると、母は一日中、寢床に寝てすごすようになった。祖母が母屋から来て、母の枕もとに坐り、夜も泊ってゆくようになった。

そんな夜は、少年は祖母にだかれて寝た。少年は母のそばが恋いしくて、祖母が軽く口をあけて、すうすうと寝息をたてはじめると、そっと祖母のそばをすりぬけて母の寢床にはいつていった。

少年は、母が夜眠れないでいることを知っている。風呂敷をかぶせて薄暗くした電燈のかげが、母の頬におちていた。眼はつむつてい

〈注 6 野面——野原のこと。〉

たが、少年には、母がつむつた臉の中から自分をじつとみまもっていることを知っていた。少年は自分の小さな枕を抱いて、母の寢床にゆき、こっそり母の横に足をすりいれて行く。すると、それまでつむつていた母の眼がしずかにあいて、少年の大好きな母の笑顔が、その眼のまわりからこぼれるのだった。

母は、少年を自分のそばに入れることを禁じられている。抱くことさえ、祖母がそばにいる時は出来なくなっていた。しかし、そうして少年が自分の寢床にはいつて来ると、身体をずらせて少年をじつと抱きしめた。

冷たい祖母の身体と違って、母の身体はいつも燃えているようにあたたかかった。少年は、母の胸に自分の顔をおしつけた。そして、小さな声で、

「お母さん、お母さん、お母さん……」

と幾度も幾度もくりかえした。母もしばらくじつと少年を抱きかかえ、手で少年の背をさすり、少年の名を呼んだ。母の声は祖母を眼ざませまいために、少年の声より一層小さく、ほそく、かすれてさえた。十分か二十分、そうして、やがて、母は少年の耳に口をよせて、

「もう、お帰り」

といった。だが、両手で少年の頬をだき、じつと少年の眼をみつめる。それから、邪険に、少年をつき出し、自分は、くるりと寝返りを打った。

【中略】

柿の実もあらかた落ちつくしたある夜、いつものように少年が、祖母の眠りに落ちた気配に母の寢床にはいつていくと、母は少年をだきしめてから、何時になく、

「お母さんの手は、こんなに細くなっちゃったよ」

⑤ といった。そして、少年が頬を母の胸におしつけようとするのを、

「お待ち」

といって、さえぎってから、かぶせた風呂敷のすきまから洩れる電燈の明りの縞目に、少年の顔をうごかしていつて、じっとその顔のぞきこむようにした。しばらく何も言わずに少年をみつめている母の両眼に、涙がうかび上つて来たかと思うと、やがて糸すじのようにその涙は敷布の上に流れ落ちていった。

少年はおどろいて、

「お母さん、どうして泣くの」

と聞いた。母はその少年の言葉をきくと、無理に笑ってみせて、

「お母さん、死ぬかもしれないよ」

といった。少年は、まだ死ぬということがよくわかっていない。それで、

「死んだら、どうなるの」

と聞いた。

「死んだら……」

母は、ちよつと口ごもったが、つづけて、

「あの世に行くの」

といった。

少年は、絵本によくかいてある天女の舞っている極楽や鬼のいる地獄やを思い出し、

「お母さんは死んだら極楽へ行くね」

といった。

母が死んだのは、それから三日あとであった。少年は一人になった。もうお母さんはいなかったが、少年は、柿の実が二つ三つだけ赤く熟れきつて梢に残っている庭先きの高い柿の木に上つていつて、口に手をラッパのようにあてて、

「お母さん」

と呼んだ。耳をすましていると、どこか遠くから、母が、その自分の呼び声にこたえている声が聞えて来るように思えた。

少年は、母が、あの世にいるのだと信じている。母の答が自分にきこえるのは、母があの世から自分の呼び声に答えてくれるからである。そう思うと、少年は、母のいるあの世へ行ってみたくなった。

いつか、まだ母が離れにいた頃、寢床から出て来て、柿の木にのぼっている少年に、

「落ちたら死んでしまいますよ」

といったことのあるのを、少年は、ふと、その時思い出した。少年は落ちてみようと思った。それで柿の木につかまっていた手をはなし、木のまたに立つて、口の中で、一、二、三と号令をかけた。高い梢に残った柿の実が真赤に夕陽をうけて映えていた。それが夕映えの空にすつと飛んで、ふきあがるように柿の木の幹が天へ上つていつた。

少年は、庭の土に、頭から、自分が落ちたことがわかったが、同時にまわりが真暗になった。それから、しばらくすると、またまわりがぼんやり明るくなつていつた。⑥ 少年は、自分が、あの世に来たのだと思つて眼をあけた。暗い電燈のかげで、自分をまるくとりまいている人がある。少年は、きつとその中に母がいると思つたが、母はいなくて、祖父や祖母や、それから母のところに来ていた医者たちが自分をみつめているのに気づいた。

(田宮虎彦「童話」より。作問の関係で、一部省略があります。)

問一 この文章において時間の経過をあらわしているものがあります。それを5字以内で答えなさい。

問二 線部①「少年の一日は、まるで夢のようであった」とありますが、その理由を20字以上30字以内で説明しなさい。

問三 線部②「田舎へ帰って来て、一日中、家の中にすっこんでいるやつがあるかい」少年にはそういったし、母には「子供は外で遊ばさなきゃあ、いかん」といったとありますが、医者は、何のためにこのようなことを言って少年を外へ連れ出し、母から離そうとしたのですか。10字以上20字以内で答えなさい。

問四 線部③「そう、お前がとってくれたの」母は、淋しそうに少年にほほえみかけて、そうこたえたとありますが、なぜ母は「淋しそうに少年にほほえみかけ」たのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分を元気にしたいを思う少年の気持ちはいれしかったが、少年が雀の命を奪い得意になっている姿は悲しかったから。
イ 田舎の生活で少年がだんだんとたくましくなり、母としてうれしい反面、自分は病気で何もしてやれない淋しさがあつたから。
ウ 元気になって欲しいという少年の気持ちはうれしいが、病が次第に重くなり、少年の思いにこたえられない悲しさがあつたから。
エ 病はすでに食事もとれないほど悪化しており、元気になって欲しいという少年の自分に対する思いやりが苦痛に感じられたから。

問五 線部④「邪険に、少年をつき出し、自分は、くると寝返りを打った」とありますが、なぜ母はこのような態度をとったのでしょうか。その理由として当てはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祖母に気づかれないように、少年を早く祖母の寢床へ戻さないといけないと思ったから。
イ 愛するわが子を自分のそばにおくことができない、病身の自分が腹立たしかったから。
ウ 少年のことがいとおしくてたまらないという気持ちに、けじめをつけようと思ったから。
エ 病気が重くなり、体調もすぐれず、まっわりつく少年の相手をするのがつらかったから。

問六 線部⑤「そして、少年が頬を母の胸におしつけようとするのを……じつとその顔をのぞきこむようにした」とありますが、この時の少年と母の心情を説明したものとして、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 少年は母が病気であることを知らず、いつも母のそばにいたいと思っているが、母は自分の死を予感し、少年との別れをとてもつらく思っている。
イ 少年は母の病気がだんだんと重くなっていることを知り、とても不安になっているが、母は自分から離れようとしないう少年をいとおしく思っている。
ウ 少年は母の病がどれほど深刻なものを知らず、いつものように母にいたいと思っているが、母は自分の死期を悟り、少年とのつらい別れを惜しんでいる。
エ 少年は母の病気が良くなっていると思ひ、母といっしょにいたいと思っているが、母は自分の病が回復しないのではないかと不安になっている。

問七 ― 線部⑥へ少年は、自分が、あの世に来たのだと思って眼をあけた……自分をみつめているのに気づいたとありますが、少年が

向き合わなければならないのはどのような現実ですか。20字以上30字以内で答えなさい。

